

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

本報では北部タイに位置するランブン(Lamphun) 県にあるメー・ピン・国立公園(Mae Pin National Park) に出向いた一日について報告する。コロナ禍で世界中がひっくり返るような騒ぎになっているが、タイはいくらかその落ち着きを取り戻しつつある。2020年の7月の第2週目から新学期が始まり、学生の数も通常とまではいかないが元に戻ろうとしているかに見える。しかしマスク着用は必要であり、教室のある建物の入り口には職員が検査用機器を持って待ち受け、問題の無い者には、検査済みの色の付いたステッカー (Sticker) を手渡し、胸などのよく見える場所に貼り付けるよう指示を与える。したがって入り口がいくつもあっては困るので、必ず検査を受ける箇所を通るように誘導すべく、赤と白の紅白色を組み合わせたテープが貼られている。検査場では顔面の額の部分の温度測定が主たる検査であり、手を消毒するためのアルコール・スプレー (Alcohol spray)のプラスチック容器が置いてある。今では手のひらをかざすだけで体温測定ができる。簡単な注意書きも書いてある。何処に出かけるにもマスク装着は義務づけられている。不急の要が無ければ出かけないと言うのが現状の鉄則である。また大学の門も夜10時には閉まる。これまでは決められた門のみが夜の9時に締まり、それ以降は別の門からの出入りという事であったが、事態が事態だけに現状ではこの規則に従った管理体制になっている。授業のいくらかは未だオンライン (Online) で行われているようであるが、学生の全てが、十分な機器を持っているわけもなく、それに対応できる状況にない場合もあると聞く。室内での講義もそうした制限の中で実施されているようであるが、野外の現地に出かける必要がある場合も生じる。この日の目的と予定は次のようであった。タイ北部では近年煙害 (Haze problem) がひどく、特に乾期にはその発生と影響が著しい。乾期になると山焼きが多く成り、それが煙害の原因であると言われる。しかしこれまでは国有林への不法な立ち入りと焼却が大きな原因の一つであった事は筆者がこの活動報告シリーズでも書いた。特に山岳地帯では新しい農地の開発など、食料、資源の生産の為に大規模な開発も行われている。数年前にタイでは大規模な洪水被害が生じた。北部チェンマイと首都バンコックの間は800 kmほど有り、その中間点に位置するのがナコン・サワン (Nakhon Sawan) である。当時はこのナコン・サワンからバンコックまでが洪水のために水浸しになり、住民の住宅をはじめ、大学や多くの政府の機関も同様であった。バンコックは海拔ゼロメートルに近く、前日に降った雨の水が次第にバンコックに集まってくると言われる。当時、車の所有者の駐車場が見つからず、多くの車が新しくできたスバナブン国際空港 (Subanabumi International Airport) に続く高架道路の上に駐車されていた。洪水被害の陣頭指揮をとる政府も旧ドン・ムアン空港 (Don Mueang Airport) の中に対策本部事務所を設けたが、そ

ここにも水が浸入する事態が生じた。あわてた政府が土嚢を積み上げて水の侵入を阻止する対応を試みたが、住民のいくらかが、自分たちのことを放置して、政府は勝手なことをして居ると不満を表し、築いた土嚢堤防の一部を破壊除去する事件も起きた。筆者がアジア工科大学 (Asian Institute of Technology) に短期間滞在している頃、雨は全く降らないのに翌朝目が覚めて外を見ると、周り一面海のように水田が灌水していた。不思議に思ったが、上記した様に他の箇所でも降った雨水が次第に低地であるバンコックの方に流れ、集まってくるのである。またあるときは、幹線道路も冠水し、道路そのものが分からなくなった状態にも遭遇した。バスの車輪タイヤ・ハウスの半分以上が水につかり、かろうじて動いていると言う状況であった。トラックの運転手は車をとめ、道路上で網を使って魚を追っていた風景も思い出す。タイの洪水被害から久しいが今では中国で豪雨がもたらした前代未聞の洪水が発生しているようである。コロナ禍に輪を掛けて、被害に苦しむ人々への対応は大変のようである。ダムの放水が更なる洪水を招いたとも言われている。タイの場合も同じようにダムの放水が被害を倍加したようである。

さて余談になったが話を元に戻す。人間の生存に必要な水と空気が洪水や煙害という 2 つの災害になる事をあらためて再認識する重要性を心に留めなければならない。メー・ピン国立公園を訪れることになった理由は、この地域での煙害が引き起こされない為に、近年研究活動を続けている上司に、来てくれないかとの要請があり、付録として筆者も同行することになった。貴重な機会を頂き、有り難い話であり、断る理由は全く無いので、2 つ返事でお受けした。チェンマイからは車で 3 時間かかるということで、午後 1 時に大学を出て途中でトイレ休憩などを含め午後 4 時にホテルに到着した。途中 1 ヶ所で 15 分ほど立ち寄ったところがある。上司の指示で車を降り、道ばたにある小高い記念碑のようなものが目に入った。その横に日本の国旗である日の丸とタイの国旗がかざしてある。適切な用地が見つけれ無かったのか、あるいはその場所が某かのいわれのある場所なのかは分からないが、祖国日本への無事帰国を果たせなかった旧日本兵の慰霊碑であった。日本語、タイ語、英語の 3 ヶ国語で説明文が用意され、線香、蠟燭の類いが手向けてあった。筆者らも数年前に同じようにメホンソン(Mae Hong Son) のムアイトウ寺院の境内の中にインパール作戦でミャンマーから辿り着いて祖国の土を踏めずに無念の生涯を遂げた日本兵の慰霊碑建立に協力した事があり、同じ記憶が脳裏に浮かんだ。同行したスタッフや教員に補足説明を施し、戦争の歴史の一端を話した。こうした慰霊碑の建立には適切な場所が確保される必要がある。「適切な場所」という意味は、もちろん慰霊碑に関係ある土地（あるいはその最寄りの地）であること、建立後の手入れ（清掃、保全、管理など）ができることが必要条件となる。せっかく建立しても、その後の維持管理ができないと尊い初志が生きない。幸にも筆者らの場合は地元の村、檀家、コミュニティの承諾と賛同を得て建立することができた。場所がそうした条件を具備していないと自然と草に埋もれ、その存在すら分からなくなる。建立した個人または団体が存在、あるいは生存している間は何とか保たれるが、時の経過と共に忘れ去られ、最終的には草に埋もれて分からなくなるという事

だけは避けたい。一端そうなる相手国にも迷惑を掛ける事になる。定期的、あるいは適当な年数の間隔で、小グループの慰霊団なり、個人または知人、友人を誘って原地を訪れ、維持管理の為の寄進を持って慰霊の旅とするのも一案である。筆者らの場合は、建立を許可して頂いた寺院の檀家代表に維持管理を依頼し、今後ともお世話頂く事で了解を頂いている。もちろんそのための経費も寺院に奉納している。日本と異なりタイでは夏でも木の葉が落ちるし、雨期には短時間ながらシャワーのような雨が降る。何も無かったところに河ができるほど多くの雨が降る。大学でもそうであるが、大学で雇用されている職員の一日は大樹の落ち葉清掃から始まると言っても過言では無い。したがって建立した慰霊碑の維持管理(Maintenance)は生やさしいものではない。これは大学の教育研究とはいささか異なるが、相手機関であるコミュニティとの協力、良好な相互関係維持、人々との友好相互理解の推進という意味で重要である。筆者がお手伝いした事業の場合は、勤務先である大学の上司の義父がメホンソンの出身であり、その関係から協力することになった。主に日本語とタイ語を英語を介して相互の意志を伝える通訳的役割である。カテゴリ(Category)からすれば国際協力、国際貢献、コミュニティ協力支援と言う事になるろうか。この慰霊碑を後にしてその日の午後4時頃に目的地近くのホテルに投宿した。

翌朝は7時に朝食を済ませ、現地に向かう。ホテルから現地までは30kmほどあり、9時からの開会式に間に合うよう余裕を見て出発、ホテルを後にする。現地では各種関係団体、地元県知事を初め首相官邸からも要人の参加があり、その若い人は日本の東大の経済学部を卒業しているということであった。日本語も流ちょうで英語で話す必要も無かったが、そうした背景を知る迄は英語での会話であった。地理的には現地の近くにプミボン・ダムが位置しており、広大な畑作農業が行われている。対象栽培作物は主にトウモロコシであるが、野菜も種々栽培されていた。数年前の大洪水ではこの地域の農地も水につかったようである。開会式の主賓の挨拶の後、メイン・イベント(Main event)である植樹祭(Memorial tree planting ceremony)が行われた。ある間隔で予め掘られた穴に苗木を植え土をかけて足で踏みしめる。植樹穴は場所が分かるように上部を黄色に塗った竹がさしてあり、植え付けを終わるとその竹の先端に、苗木の根元から取り外したビニールのポットを逆さにしてかぶせ、その場所が既に植樹を終えたことを知らせる目安にするのが一連の植え付けプロセスであった。参加者が大人数であるから、ひとりあたり5~6本も植えれば殆ど問題が無く、またそれ以上であると、きつい太陽の照りつける状況下では少々熱すぎるので、ちょうど良い時間と作業量であったかと思う。なぜ筆者と上司、それに関係スタッフがこの式典に招待されたかという理由は、森林焼却(Forest burning)が元で深刻な問題になりつつある煙害をこれ以上大きくしないと言う事で、できるだけ空間を利用して植林をし、森林再生を図るというものである。もちろん畑作農業での食料生産に加えて、他方で煙害を予防するという意図がある。PM2.5の排出量をできるだけ抑えたい、と言う観点から煙害研究プロジェクトの代表である上司の所に話が来て、それに応じる形で参加したと言う背景である。煙害が北部タイの観光産業に大きな影響を落としていること

は今では周知のことである。午前中に行事は終わり、昼食を採って帰途に付くが、実はもう一つ立ち寄り先が用意されていた。同じランブンのパサン(Pasang) というところで、もう一つのコミュニティ支援のプロジェクトが進行中で、ほぼ最終段階にきていた。進行の状況を確認するべく立ち寄り、必要書類への署名、承認とともにメインの建物である公民館(4つの部屋から成る)に相当する建物と付随のトイレの仕上がり度を確認した。EIT (Engineering Institute of Technology) というタイの工学関係の組織で、タイの大学の工学関係者が、地域別に分かれてコミュニティからの種々の要望に応じている。これまで筆者が関わった類似のプロジェクトは山岳少数民族の村に学校を建てる事が多く、木造を鉄筋コンクリートにし、中の設備としての椅子や机を新規に供与するなどがその例である。額の大きな予算では無く、いささか中途半端な予算規模のプロジェクト要請であるから、時には日系企業に寄付をお願いしたりする。もちろん工学部であるから建築、土木を専門とする教員が加わり、現場を訪れ、基本設計、必要資材、予算見積もりなどを行ったうえで資金集めと言うことになる。筆者の記憶では、筆者はこうした学校建設設備充実プロジェクトに少なくとも3つ以上は加わった。そして今回のコミュニティ公民館の建設である。チェンマイに招かれてから約10年余と言う事と、こうしたプロジェクトへの参加協力という実績、貢献度から表彰状も頂いた。まさに申し訳ない思いである。現在並行してもう一つのプロジェクト申請の準備が進んでいる。メホンソンのパイ(Pai) という所でコミュニティが管理している建物が、漏電がもとで火事となり消失した。何とかならないかとの話が出て現地に出向き、現場の状況視察が行われた。関係の写真を以下に示す。早々に現地に出向き、現場調査。場所(位置)と面積の確認から素案を作りだし、後に詳細な設計図面を作成し、最終的な建設工事費の見積もりをもとに業者に発注する。完成までの期間に幾度か現地を訪れ、工事の進行状況を観察、確認し出来上がった時点で経費の支払いを完了する。タイの家屋建築物の殆どがそうであるが、基本的にコンクリートで基礎を打ち、鉄筋コンクリートで支柱となる柱を立ち上げる。屋根の部分は軽量鉄骨を溶接、またはボルト締結し、その上に組んだ構造物を立ち上げた柱の上に載せて固定する。部屋の仕切りとなる壁は、主に細い鉄筋を入れたブロック、または煉瓦を積み上げ、必要な大きさの窓枠を明けておいてそこにアルミサッシをはめ込むと言う構造である。床はタイル張りが一般的である。今回の男子用と女子用を1個ずつ備えたトイレを含む公民館の建設費の総額は、詳細は聞いていないが30万~50万バーツと言う(日本円で100万円から150万円ほど)から、日本人から見れば「安い」と思うのが一般的では無かろうか。新車1台の値段より安い。訪れた時は人々がロンガン(龍眼)果実の収穫時期で、その選別とパッキング(Packing)の作業に追われていた。新築した公民館の脇には高天井の建物が併設しており、ここが収穫した農産物の集荷場として利用されていた。ただし、この建物はプロジェクトには入っていない。

<写真>



メー・ピン国立公園での植樹祭イベント

植樹祭開催のキャン (左) 開会式での主賓の挨拶と参加者 (中) 植樹中の筆者 (右)



ランブーン県パサンコミュニティ公民館新築プロジェクト
メインホール (左) メインホール内部 (右)



火災で焼失したメホンソンの
コミュニティ建物
(関係者との会合)



筆者も協力して建立したクン・ユアム
のムアイトウ寺院内の旧日本兵慰霊碑



ランブーン県メー・ピン国立公園に向かう途中の道路脇に建立された
旧日本兵の慰霊碑 (左) とタイ語、日本語、英語の3ヶ国語で記さ
れた説明文。